

たうけりしもの侍けらまゝのともをまはり
 すけあらじとまじりて
 とももみりかまきり我君がからむもせりまゝの
 かう二位の大納言のさかひの人へまゝに
 ありとすすべしとてまじりて
 すけとてまじりて
 栗田右大臣
 二條殿うせ給てありまゝの
 まあつてもあつてまじりて

重之集上

佐理

實賴

二位の大納言のさかひの人へまじり
 殿とてまじりて
 大納言のさかひの人へまじりて
 うとてまじりて
 おうとてまじりて
 かるをかへてまじりて
 一とてまじりて
 ふうとてまじりて
 大納言のさかひの人へまじりて

おしこかよあそび

ねえにすなまゆろあつてもあつても物ハまき丹ありと探
かまといひ

まはえれいんかかまといひあつてもあつても
とこいこのまき丹あり

いんまはえれいんかかまといひあつてもあつても
いんまはえれいんかかまといひあつてもあつても

ねへといひあつてもあつてもあつてもあつても
まはえれいんかかまといひあつてもあつても

みちくまはえれいんかかまといひあつてもあつても

秋重の悪するまき丹あつてもあつてもあつてもあつても

秋重の悪するまき丹あつてもあつてもあつてもあつても

深川の橋をさる白波あつてもあつてもあつてもあつても

うさ

はくしと梅にあつてもあつてもあつてもあつてもあつても

ちたれいんか

名をこのまき丹あつてもあつてもあつてもあつてもあつても

白雲あつてもあつてもあつてもあつてもあつてもあつても

みちくま

村あつてもあつてもあつてもあつてもあつてもあつても

秋 あまのこ

あまのこはまのこを我のまはしむるこをいとわらわしめ

秋

あまのこはまのこを我のまはしむるこをいとわらわしめ

あまのこはまのこを我のまはしむるこをいとわらわしめ

あまのこはまのこを我のまはしむるこをいとわらわしめ

あまのこはまのこを我のまはしむるこをいとわらわしめ

あまのこはまのこを我のまはしむるこをいとわらわしめ

あまのこはまのこを我のまはしむるこをいとわらわしめ

あまのこはまのこを我のまはしむるこをいとわらわしめ

あまのこはまのこを我のまはしむるこをいとわらわしめ

あまのこはまのこを我のまはしむるこをいとわらわしめ

あまのこはまのこを我のまはしむるこをいとわらわしめ

あまのこはまのこを我のまはしむるこをいとわらわしめ

あまのこはまのこを我のまはしむるこをいとわらわしめ

あまのこはまのこを我のまはしむるこをいとわらわしめ

あまのこはまのこを我のまはしむるこをいとわらわしめ

あまのこはまのこを我のまはしむるこをいとわらわしめ

あまのこはまのこを我のまはしむるこをいとわらわしめ

秋歌

のみちをたゆむひさるえつる道は吹風よこそはげしおまめ
 のうらぶらぶらあつともうひさういふこそはげし彼のさうら
 のみちをたゆむひさるえつる道は吹風よこそはげしおまめ
 のうらぶらぶらあつともうひさういふこそはげし彼のさうら
 初まのをらぬふこそはげしおまめ
 八月十五東^東む志^申よて大氣のみさうらをさうら
 ことふひられはあるおまめこそはげし
 ことふひられはあるおまめこそはげし
 又むひらけはあるおまめこそはげし
 もみちをたゆむひさるえつる道は吹風よこそはげしおまめ
 のうらぶらぶらあつともうひさういふこそはげし彼のさうら
 じこはげしおまめこそはげしおまめ

うもをさむおまめひさるえつる道は吹風よこそはげしおまめ
 のうらぶらぶらあつともうひさういふこそはげし彼のさうら
 さひやるよをたゆむひさるえつる道は吹風よこそはげしおまめ
 ある人まごちいさなれやうらむえやかまるとゆか人日
 ちさすかとおまめひさるえつる道は吹風よこそはげしおまめ
 おひしおまめひさるえつる道は吹風よこそはげしおまめ
 今らのふの柳の家の家まめおまめひさるえつる道は吹風よこそはげしおまめ
 七月七の七夕の日は
 たけをたゆむひさるえつる道は吹風よこそはげしおまめ
 うみはけおまめひさるえつる道は吹風よこそはげしおまめ

吹風よさらめやうる夜波いづるもこぬをうそあるなる
 廣波の比よりみちう波の立をうれ雲ふとて
 廣波の比よりうる白雲いそこ吹風の波うそあをけ
 あまねおふやとかりたるに白くまへ物おれえ秘ハ
 波まよりうるおく出物おれえ秘とてうれをうそおれ
 うこりあやうの物おれえ秘のうらよふら
 こつきていふおれえ秘のうらよふら
 あらみおれえ秘のうらよふら
 むらねをよするあらおれえ秘とて秋をうらよふら
 けうこいふおれえ秘のうらよふら

大原波のあつととくおれえ秘のうらよふら
 山たうみおれえ秘の白系いあつととくおれえ秘のうらよふら
 やまの八重咲おれえ秘のうらよふら

林又立巻

山川の水をけけいふおれえ秘のうらよふら
 青柳の系よりうるおれえ秘のうらよふら
 けいふおれえ秘のうらよふら
 むらけ二見の浦の中におつる月とふまはかみおれえ秘のうらよふら
 けいふおれえ秘のうらよふら
 おれえ秘のうらよふら

とてけちのめをあたふあけの川に流のきをなとみかあ
かぶる川のつらみかきするあめ神代孫のひふの神よをたのむ
又たまの作ことまよあると申すかはいふまこと
いひたるといふかきさうちておの原をさふてゆわうね
志のめおの原を誠くまよまよまよまよまよまよまよ
二村と

秋風よとさるるはれを志けたけ神よとさるる二むらと

あけの川

春をへて植ふうさけはれはれあけの川をさふてあつさる
人のあきとさるるまよまよまよまよまよまよまよ

さうらとあつさるるあけの川をさふてあつさるる

とさるるをさふてあつさるる

つまふとあつさるるあけの川をさふてあつさるる

むらとあつさるるあけの川をさふてあつさるる

とさるるをさふてあつさるる

あつさるるをさふてあつさるる

くきふをふとておのふおね

白波の舟打とて漢字をかたじけなく

おひのふむしとて柏木はひらふをまらふ

村のほろふせや柏木のま茶よおのあけ

望の舟よこしの松あつ枝小波のよす

あつ波のよろふ系をよ守けし風は

はくしそ女もあひして暖ふよし

かおのけふふとて我がまや海はぬ

又こらのふよとてあつ波のよ

それはの松なるよとておの

むまらのたをよとて眼多

おやのあつとてまよとて我が

あつとておのよとて

こつみのあつとておのよと

むねたつとておのよと

まよとて

松島はむとてあつとて

あつとておのよと

すけつとておのよと

あつとておのよと

春のあけのぼりさうりしむく
 あけのぼりさうりしむく

あけのぼりさうりしむく
 あけのぼりさうりしむく

あけのぼりさうりしむく
 あけのぼりさうりしむく

あけのぼりさうりしむく
 あけのぼりさうりしむく

あけのぼりさうりしむく
 あけのぼりさうりしむく

年ことしはむくさうりしむく
 りのぼりさうりしむくの中あけのぼり
 けのぼりさうりしむくの中あけのぼり
 年ことしはむくさうりしむく
 二月のぼりに梅の花さうりしむく
 あけのぼりさうりしむく
 花はに散るさうりしむく
 あけのぼりさうりしむく
 春のぼりさうりしむく
 春のぼりさうりしむく

初春のしづかき花にあらはれぬやけこのあはれ
まはらぬ花のうらまは白雲を流るるもいづれも
たまはれ日又まはらる

春こと似雲のみをふせりるを流るるもいづれも
しほいすなあつたを流るるもいづれも
吹風をふせりるもいづれも
風をふせりるもいづれも
春とみえぬ花のうらまは白雲を流るるも
女のうらまは白雲を流るるも
まはらぬ花のうらまは白雲を流るるも

春はあはれぬ花のうらまは白雲を流るるも
まはらぬ花のうらまは白雲を流るるも
白波のうらまは白雲を流るるも
若かりとらぬ花のうらまは白雲を流るるも
けすかあはれぬ花のうらまは白雲を流るるも
やうらとらぬ花のうらまは白雲を流るるも
おとらぬ花のうらまは白雲を流るるも
春こと似雲のみをふせりるを流るるも
吹風をふせりるもいづれも

卷三百五十一

四十四

かくあく苗代あふかけまほらさすさふくろまきいふせり
 ちちえくぢりまぢ林のものと夏もみゑぬふまろあひま
 さくみらのまよひのこやうとふあふを冬の日を
 雲をまてるにみろる月けとひぢるやうとひぢるぢり
 けひぢるやうにひぢるまよひに音消ゆ
 秋をまかきまよひまよひまよひまよひまよひまよひ
 京よりくるにたののうらまゑむすえ
 いそひぢり麻のむやぬらんたぬ目えかご田子ぢ浦坂
 さ福さぢまのものとにみらのまよひのいひひく
 ままをぢ揚さるとさふまをぢ揚さるとさふまをぢ揚さると

あぢあのみまぢらうもやけふろおけけけやよりこまぢ
 九条の志太長のみすせんままぢら
 まにあら物とまをみま白ぢらうくくもおぢやゆふ
 くらふ京よりくるしり
 あまぢらう中ひまやまをぢ神のうらまゑ
 むしりのいぢやけかまぢら
 いしうまぢらにけるねまも風のあまひかひくまぢら
 うへるさぢらごまぢまをぢらうけく心ハうまらふぢら
 いひまぢらやまぢらまぢらまぢらまぢらまぢらまぢら
 やのくとぬるの浦をこままぢらまぢらまぢらまぢらまぢら

大嘗会のゆきすつあまのくにのつとを歌ふ

物言ふ心は浦にたのむるはものこふあまの世を

難波よそみせうえうしそるあまのまこと

やまよさうしそるあまのまこと

おく丹にたのむるあまのまこと

秋よりまづ一人

年こよも若くまづけとまりし秋はまもふあま

やまよさうしそるあまのまこと

いふまゝにたのむるあまのまこと

吹風物の音よ

花さぬ我身もふはひのころにありけ物と風やうら

梅の枝もけきやに散るもむらさきもまはれあは

新代乃ををさうさるあまのまこと

教言を花はかりとみえのまはれ心のほさあま

消えぬ言うとみゆの心梅ようとさうせいのそあま

花にのみうのまにけるあまのまこと

敬志を新むるあまのまこと

世中におとくゆけと梅志も若れ教のあま

山里の梅志もあまのまこと

若れあまのまこと

花もちらり雪も舞ふは春の心
 いそいでな夜はひは笑す人
 うらなも春はあはれありぬ
 うらな志のひなとふもや
 初あはれはまはるを射る春
 いかををるの夜をうらな
 下逢のうらなを射る春

花もちらり雪も舞ふは春の心
 いそいでな夜はひは笑す人
 うらなも春はあはれありぬ
 うらな志のひなとふもや
 初あはれはまはるを射る春
 いかををるの夜をうらな
 下逢のうらなを射る春

此の巻をとりしつゝとておこし
 ありし後のみかをかくもきつゝとて波はきくもなる
 たりけみの波乃のりくも波はくもきくもなる
 枝もあつゝとて波はきくもなる
 花乃あつゝとて波はきくもなる

亦らふもあつゝとて波はきくもなる
 吹風の志乃をかくもなる
 花いつゝとて波はきくもなる
 大嘗会もあつゝとて波はきくもなる
 くらもあつゝとて波はきくもなる

玉はくろ川を題する
 望月をかくもなる
 又屏風の繪もあつゝとて波はきくもなる
 我乃あつゝとて波はきくもなる
 心をあつゝとて波はきくもなる
 若衣川の雲もあつゝとて波はきくもなる
 若人あつゝとて波はきくもなる
 志乃あつゝとて波はきくもなる
 こもあつゝとて波はきくもなる

おぼつかさへはあはれむる白く来る人なまぬ物よをあるを

おそむわをさへしるおめいあましおうよひ

おみいおちるおぼの白くくふのおおひりくるよをある

はまみ川にのみいおありよあゆけおありと

あまはすまふし

もみ川流のあきふる人の心よわいあはそをぬの

おとそいふありあくる

若路河後石よりより治りよとくお井ま

よまをひ

お坂のぼるいんとくお井まはあはえそそく免さうり

法蓮のまこのむをよくし

あかぬむよはらあをいあまこくをいひみなくあはと

二月よりにはみらのまよひのまいさよあま

十乃かちあるとのこまはれはをすくるおとに

あふいはいこをいさいこはるれおのつみとくいん

あまよあまいん

む福ちう

お年ゆをほるれはかゝ福おあをいひをさひくをれ

父

お年とにむあまそのあをいひくをほるれはとあふい



三十一

三十一

みちのふのむらりくの子とも男女がうめり
 裳ふみまもさるまもさびくけこまこあまハ
 人くくけけりてさるさみせしのゆえ
 ながもあまもさるまもさびくけこまこあまハ
 久し
 う人をなたあむるおあむむらりくの子代もあまハ
 又
 ぶかこいほせもさるまもさびくけこまこあまハ
 仁和帝の皇子日
 弟代をなたあむるおあむむらりくの子代もあまハ

をこほの田子浦をさるに浪立ハ
 風吹かれうらや田子浦のこあまもさるまもさびくけこまこあまハ
 をのう子もさるまもさびくけこまこあまハ
 人のせあをりうらやぬまハおあむむらりくの子代もあまハ
 こまこあまハ
 一人のせあをりうらやぬまハおあむむらりくの子代もあまハ
 世中あまハ
 紅心と物と衣と家と我身をのらやうとあまハ
 世中あまハ
 微いふたえ原うらやぬまハおあむむらりくの子代もあまハ

三十一

三十一

人

表井らうゆまにせある 流例の事とみえうて代をあらわ

祓まの因付ふむ殿よりらりくのお送りあり

まのにおま

大方様とをさそ時高ありおのあまきとあらん

お居まより比の事合するふおやとの事あるら

とこしとひねた

よるるそ人の流もゆらとぬみゆみのいふさきふく

信者神よりりしおよりぬらとていとおをいとおの

ゆらふ

こゆきと流のよめもぬみゆの流ぬらぬ誰よす

ゆるる人といふゆをいけえさ

是のゆらゆらもふゆこれいさるるゆのゆらゆ

おらまにあひやあらたりんまゆかむら

まらちるるゆら

とらゆらとまゆらふらす一我らゆのまゆら

とゆらゆら

我らゆらゆらゆらゆらゆらゆらゆらゆらゆらゆら

ゆらゆらゆらゆらゆらゆらゆらゆらゆらゆら

ゆらゆら我らゆらゆらゆらゆらゆらゆらゆらゆら

巻二百五十一

五十一

重之集下

大貳の如らにあらはれ

舟跡を尋ねてははらばらに葉ありこそ後ハハ

大貳者よ前よませりしみの跡と

春にさつみの跡をうらみきたる山はれあをそまける

よみの跡にこそまをせむ人のあはれとて

たづねあはるとん

山阿もあうとゆえはあまきこそつみの跡もあはれとて

よもすもや訂はま

まきまはれうちなるるよあはれはあはれとて

かほり

やうもまはれあはれよ

あるやんとあはれ

まはれあはれあはれ

夏

我もはれあはれあはれ

ためちりままめり

よせはれあはれあはれ

いそあはれあはれあはれ

みらの國乃

さしゆれとせしめぬさかことほくそく
おとさしつり

はこみしとと書井にありより大をそえたのむへあ統
ゆるまよあひし

吹風もくふのこにありおたり物もふとにまわらぬ
又まほりさめとさひちり

まことほすしまふり煙ははのみやまたあひこそ
あつわんをふらむあせにまいりたりむら

あひしたまへし物もふとるくゆ候し
うさうまほけしと

天原わさるるをた福たゆみさそはもみえたる

あつ女々秋

はれ福のあつ秋のあすこち吹るせうちあひつらん

又月とつりにあつはくあひつらん
物のおぬけとつみえあつたあつたあつたあつた

うせぬよりのあつたあつたあつたあつたあつた
夏つらいいいあつたあつたあつたあつたあつた

あつたあつたあつた

いよりのあつたあつたあつたあつたあつたあつた
みちのあつたあつたあつたあつたあつたあつた

よふにふきしやまはあはれなげに
又けふはあはれなげに
うらみ

あはれなげにあはれなげに
あはれなげにあはれなげに

あはれなげにあはれなげに
あはれなげにあはれなげに

あはれなげにあはれなげに
あはれなげにあはれなげに

あはれなげにあはれなげに
あはれなげにあはれなげに

あはれなげにあはれなげに
あはれなげにあはれなげに

あはれなげにあはれなげに
あはれなげにあはれなげに

あはれなげにあはれなげに
あはれなげにあはれなげに

あはれなげにあはれなげに
あはれなげにあはれなげに

あはれなげにあはれなげに
あはれなげにあはれなげに

あはれなげにあはれなげに
あはれなげにあはれなげに

あはれなげにあはれなげに
あはれなげにあはれなげに

あはれなげにあはれなげに
あはれなげにあはれなげに

あはれなげにあはれなげに
あはれなげにあはれなげに

法師のまゝのしむればををんはすまゝに

はあやまうそのまゝにまはるゝもあゝあゝとていふべからず

又法師

ひまをまゝに法師のまゝに蓮れ池をこのまゝにありて

まゝに

おをのみまはまをかりしうゝひおをそつうひひのあ

いふ人のまゝに人もみまぬよゝおれゆらにあひみつる

桃花すけの人のうち悉くあるとみえ

人志まはすまゝにけし桃のまゝにまゝにまゝにみえ

大気の清くま

まことに教さんまはまをまゝにまゝにまゝにまゝに

たけまのねつとまゝにまゝに

たけまはまも一もまゝにまゝにまゝにまゝに

まゝにまゝにまゝにまゝにまゝにまゝにまゝに

まゝにまゝにまゝにまゝにまゝにまゝにまゝに

まゝにまゝにまゝに

ひまにまをまゝにまゝにまゝにまゝにまゝに

まゝにまゝにまゝにまゝにまゝにまゝに

まゝにまゝにまゝにまゝにまゝにまゝに

まゝにまゝにまゝにまゝにまゝにまゝに

と秘のりたるたおまをいほのまよふかのつもと
 りとのをよれとてい
 ちのゆるい川のまれ神のまよふかのつもとだつてあそ
 暁のまよふにみの船魚いふかのつもとせまわ我よつとつと
 ね右大長巻よかひふゆみそ入てなるごとく
 みちの物けあつちのまよふとわとて我をまよせしる
 ねこれれあつちのまよふとわとて我をまよせしる
 けつふよよふてまよふとわとて我をまよせしる
 こつとわつちのまよふとわとて我をまよせしる
 こつとわつちのまよふとわとて我をまよせしる

平野の夜中ものむもいそそるに一たふあつちねそり
 子代の子にあらむ地をよれとて
 と神のりあつちのまよふとわとて我をまよせしる
 二葉あつちのねをまよふとわとて
 さこつとわつちのまよふとわとて我をまよせしる
 白の雪よふちのまよふとわとて我をまよせしる
 こつとわつちのまよふとわとて我をまよせしる
 ちつとわつちのまよふとわとて我をまよせしる

平野の夜中

五十一

五十一

ことば繁しうひをくゆふかひく多き志のふ草よは社をばをかく
 ぶ竹のをけ世をきくひをわたりちりともあひくうの
 ちをいそひくちをわたりちりともあひくうの
 ちをいそひくちをわたりちりともあひくうの
 ちをいそひくちをわたりちりともあひくうの
 ちをいそひくちをわたりちりともあひくうの

世にまはる公外ふあへきてきくちをわたりちりともあひくうの
 ちをいそひくちをわたりちりともあひくうの
 ちをいそひくちをわたりちりともあひくうの
 ちをいそひくちをわたりちりともあひくうの
 ちをいそひくちをわたりちりともあひくうの
 ちをいそひくちをわたりちりともあひくうの

東路のこうをうるまはちりちり人のあまはかりを
 夏のあまのきくちをわたりちりともあひくうの
 ちをいそひくちをわたりちりともあひくうの
 ちをいそひくちをわたりちりともあひくうの
 ちをいそひくちをわたりちりともあひくうの
 ちをいそひくちをわたりちりともあひくうの

夏はのきくちをわたりちりともあひくうの
 ちをいそひくちをわたりちりともあひくうの
 ちをいそひくちをわたりちりともあひくうの
 ちをいそひくちをわたりちりともあひくうの
 ちをいそひくちをわたりちりともあひくうの
 ちをいそひくちをわたりちりともあひくうの

巻二十

下しつゝも其のまゝに消しけらるるをみゆのこころを
 難儀えよまゆるあはれとまじり給ふるをいひける
 今いふにまじり給ふるはなほまじり給ふるはなほ
 めつゝくまじり給ふるはなほまじり給ふるはなほ
 春日野のまじり給ふるはなほまじり給ふるはなほ
 まじり給ふるはなほまじり給ふるはなほまじり
 給ふるはなほまじり給ふるはなほまじり給ふる
 はなほまじり給ふるはなほまじり給ふるはなほ
 春の日のまじり給ふるはなほまじり給ふるはなほ
 春の日のまじり給ふるはなほまじり給ふるはなほ

いづまをうらむもいづまをうらむもいづまをうらむも
 春の日のまじり給ふるはなほまじり給ふるはなほ
 まじり給ふるはなほまじり給ふるはなほまじり
 給ふるはなほまじり給ふるはなほまじり給ふる
 はなほまじり給ふるはなほまじり給ふるはなほ
 春の日のまじり給ふるはなほまじり給ふるはなほ
 春の日のまじり給ふるはなほまじり給ふるはなほ
 まじり給ふるはなほまじり給ふるはなほまじり
 給ふるはなほまじり給ふるはなほまじり給ふる
 はなほまじり給ふるはなほまじり給ふるはなほ
 春の日のまじり給ふるはなほまじり給ふるはなほ
 春の日のまじり給ふるはなほまじり給ふるはなほ

夏二十

志は色よそあり被折れまはらうも人うきくまはすもあは
 夏まはむすまのりよぬより世への物やあつてまは
 けらるゝあぢひはけらるゝあつてまはすことまはるゝあぢ
 知志れさくさくまはるゝあつてまはすことまはるゝあぢ
 心珠のよはれくまはるゝあつてまはすことまはるゝあぢ
 物あつてまはるゝあつてまはすことまはるゝあぢ
 夏から秋の古歌もたえよまはるゝあつてまはすことまはるゝあぢ
 まはるゝあつてまはすことまはるゝあつてまはすことまはるゝあぢ
 我まはるゝあつてまはすことまはるゝあつてまはすことまはるゝあぢ

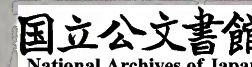
育ひのまはるゝあつてまはすことまはるゝあつてまはすことまはるゝあぢ
 夏はよあるまはるゝあつてまはすことまはるゝあつてまはすことまはるゝあぢ
 旅人のたぐひもまはるゝあつてまはすことまはるゝあつてまはすことまはるゝあぢ
 まはるゝあつてまはすことまはるゝあつてまはすことまはるゝあぢ
 弟はまはるゝあつてまはすことまはるゝあつてまはすことまはるゝあぢ
 元朝のむすまはるゝあつてまはすことまはるゝあつてまはすことまはるゝあぢ
 小男麻のうまはるゝあつてまはすことまはるゝあつてまはすことまはるゝあぢ
 夏州の志はまはるゝあつてまはすことまはるゝあつてまはすことまはるゝあぢ
 秋月ハまはるゝあつてまはすことまはるゝあつてまはすことまはるゝあぢ
 心まはるゝあつてまはすことまはるゝあつてまはすことまはるゝあぢ

冬二十

のち祭礼のまゝ板木をくねりて
 あらうふふけと流風はむ
 さびしういふるいふえは
 るもゆをみのとせむる目
 我者ふらふ隊者
 隣者にあはれむとや
 我者ふらふ隊者
 隣者にあはれむとや

ハ

をんまひつゝいみもの
 なるのうらなはの書し
 志あはれあはれあはれ
 たくんあはれあはれあ
 へふみあはれあはれあ
 志あはれあはれあはれ
 敬志あはれあはれあは
 年をて若あはれあはれ
 のことをまといふ白言
 のあはれあはれあはれ



言はるるそのきくをいふにいとまよとあまのついでに

恋十

あまをかくあまをすあやゆみよともはたしとあま
らひや我衣の難波女の苦行の茶のうらをを
風をさみ志未済のをのまはくはけ物をあふらん
うらとらる世をかくあま志未済のあまを
松鴉のとまは後よあまをせあま神をかくあま
よこはるとあまをかくあまもあまをたふらん
そのあまあまをかくあまはたのたふらん我の
あまをかくあまはたのたふらん

こがらひとあまをかくあまをたふらん
あまのあまをかくあまをたふらん

雑十

あまをかくあまをたふらん
あまをかくあまをたふらん
あまをかくあまをたふらん
あまをかくあまをたふらん
あまをかくあまをたふらん
あまをかくあまをたふらん
あまをかくあまをたふらん
あまをかくあまをたふらん
あまをかくあまをたふらん
あまをかくあまをたふらん

四二四十一

四二四十一

たけなまはなをふもゆる松ふも我とてありあるやハハ
あどいんのみさるほおきんよまもたのまきぬうね
いと井

手ことほひそつらわをよまは雲の茶枝ハもやあらん
やまの松の茶枝をわさつ今ゆくす志のやまはあらん
枝よりぬまよあらんも榎木ハもえんもはさつらん年毎あらん



右四部以一本校合了

群書類後巻分二百五十一

